



オスマンのパリ改造とゾラ『ボヌール・デ・ダム百貨店』

吉田, 典子

(Citation)

国際文化学研究 : 神戸大学国際文化学部紀要, 8:1-42

(Issue Date)

1997-09

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81001184>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001184>



オスマンのパリ改造とゾラ『ボヌール・デ・ダム百貨店』

吉田典子

フランスの第二帝政期において、セーヌ県知事ジュールジュリエーヌ・オスマン（一八〇九—一八九二）が、ナポレオン三世の命を受けて遂行したパリの大改造事業は、この時代を舞台としたゾラの《ルーゴン・マカール叢書》において、さまざまな形で描き出されている。この都市改造事業を正面から取り上げた作品は、土地転がして大儲けをする投機師アリスティッド・サカールを主人公とした第二巻『獲物の分け前』（一八七二）であるが、¹続く第三巻『パリの胃袋』（一八七三）のように、改造計画の一環である中央市場の新しい鉄とガラスの建築物が、小説の中心的存在となっている場合もあれば、第七巻『居酒屋』（一八七七）の最終部におけるように、零落して町をさまようジェルヴェエズと対照をなすかのように、「恥ずかしくなるほどきれいになった界限」が描写されていることもある。²

ところで叢書の第十一巻『ボヌール・デ・ダム（婦人方の幸福）百貨店』（一八八三）は、さまざまな近代的商法、とりわけ対女性戦略によって驚異的に売り上げを伸ばし、近隣の小商店を食いつぶしていくデパートの発展を描いた小説であるが、ここでもオスマンのパリ改造は重要な背景を構成している。ボヌール・デ・ダムの経営者である主人公オクターヴ・ムーレは、新街路の敷設計画に目をつけ、隣接する土地家屋をひとつまたひとつと買収して徐々に店舗を拡

張しながら、ついに新しい大通りに面した壮麗な建物を完成させるにいたるのである。この小説ではオスマンのパリ改造事業とデパートの発展とが巧みに結びつけられている。

両者の関連は、ゾラが、後に《ルーゴン・マカール叢書》となる連鎖小説をはじめ構想した一八六八年末頃の段階から、すでに存在していたようだ。この頃ゾラは、叢書のための覚え書の中で、近代社会を構成するのが四つの社会（「民衆」、「商人」、「ブルジョワジー」、「上流社会」）ともうひとつの「特殊な社会」（娼婦、殺人者、僧侶、芸術家）であることを記しているが、その中の「商人」commerçantsの箇所には、「解体事業に関わる投機師と高級商業（実業）speculateur sur les démolitions et haut commerce (industrie) という記述がある³⁾。ゾラの頭の中では、パリ改造事業と高級商業（デパート）の発展とが緊密に結びついていたようなのである。解体事業に関わる投機師として活躍することになるのは、すでに述べたように『獲物の分け前』のアリステッド・サカールであるが、『ボヌール・デ・ダム百貨店』においても、アルトマン男爵という銀行家にして実業家である人物が、ムーレの協力者として登場する。あるいはこの《ルーゴン・マカール叢書》構想の初期の段階では、ゾラの頭の中で、後のアリステッド・サカールとオクターヴ・ムーレとが、近代産業社会の成功者として、ひとりの人物像を形成していたとも考えられるのである。

本稿においては、『ボヌール・デ・ダム百貨店』の中で、都市改造とデパートの発展がどのように関連づけられているかを具体的に検討しながら、それらが近代社会の構成要素としていかなる特質を持つのかを考察したいと思うが、その前にフランスにおける実際のデパート産業の発展の歴史とオスマンのパリ改造との関わり、そしてゾラの『ボヌール・デ・ダム百貨店』の構想について、簡単にまとめておくことにしたい。

1 フランスにおけるデパートの発展とゾラの小説

(1) デパートの誕生

デパート *grand magasin* (フランス語では「大きな店」の意)の前身として一般に認められているのは、マガザン・ド・ヌーヴォーテ *magasin de nouveautés* と呼ばれる商店形態である。ヌーヴォーテ *nouveautés* (「新しいもの」とは、「衣服や装飾品の分野(生地、下着、装身具など)」で市場に出された最新流行の品物」のことで、要するにファッション関係の新製品を示すが、こうした品物を専門に扱う店がパリの町にぼつぼつと現れ始めたのは、十八世紀末から十九世紀はじめ頃のことであるらしい。これらの店では、新しいさまざまな婦人服地に加えて、レース、毛皮、メリヤス、さらにそのころから流行し始めていたシヨールなどを扱い、また王政復古末期(一八二〇年代後半)からは、その後しだいに有力商品となる既製服も扱うようになった。^⑤

マガザン・ド・ヌーヴォーテの特色は、その扱う商品に加えて、豪華で人目を引く店のしつらえにあった。この点については、バルザックの『セザール・ピロトー』(一八三七)の一節が、もっともわかりやすい説明を与えてくれる。

ある晴れた日、彼「セザール」はマリー橋からサン・ルイ島へ入るときに、アンジュー岸の角にある店の入り口に、若い娘が立っているのを見た。コンスタンス・ピロロー「後にセザールの妻となる女性」は、「ル・プチ・マトロ」^⑥というマガザン・ド・ヌーヴォーテの主任女店員であった。この店は、その後パリに現れた同種の店の最初のものだった。つまり、彩色した看板や風にひらめく旗、ブランコのように張りわたしたシヨールやトランプの城のように配置したネクタイやその他のいろいろな商業的誘惑でいっぱいのシヨールウインドー、正札、飾り紐、ポスター、

商店の店先が商業の詩 *des poèmes commerciaux* となるほど完璧な域に達した視覚的効果や幻惑を持った店のことである。「プチ・マトロ」に置かれていた「ヌーヴォーテ」と呼ばれるすべての品々は、安価で、そのためにこの店は、パリで流行や商業にもっとも適さない場所でありながら、非常に人気を集めていた。⁽⁶⁾

実在した「プチ・マトロ」の創業は一七九〇年であり、バルザックが小説の中でセザールとコンスタンスの出会いを設定しているのは、一七九九年のことである。このようにもっとも古いマガザン・ド・ヌーヴォーテの創業は、十八世紀末にさかのぼるが、こうしたさまざまの視覚的効果や広告の利用に加えて、正札、入店自由、薄利多売方式、返品・交換など、それまでとはまったく異なった販売方式を持つ店が数多く出現するようになったのは、一八二〇年代から七月王政下にかけてのことである。それには、商品の大量生産と多様化、消費者側の経済的成長といった、供給と需要に關わる問題に加えて、都市機能の面でもさまざまな条件が整備される必要があった。

「プチ・マトロ」はサンルイ島という、「パリで流行や商業にもっとも適さない場所」に位置していたが、そのころパリで流行の先端をいく盛り場を形成していたのは、パレロワイヤルであった。一七八四年、オルレアン家の五代目当主ルイ・フィリップ・ドルレアンは、自身の居城の一階部分を改造して、庭園をめぐる回廊を商店街にした。この回廊の骨組みは木で作られていたので、ギャルリー・デ・ボワ *Galleries des Bois* と呼ばれたが、各商店の前面には大きなガラスのウインドーが設けられて、人々はどんな天候の時にも、足元を気にすることなく、回廊を散歩しながらウインドー・ショッピングを楽しむようになった。このギャルリーは、マガザン・ド・ヌーヴォーテとはまた別の意味で、デパートの前身と言えるものである。同様に、やはり十八世紀末から発生し、十九世紀前半に最盛期を迎えたパサージュと呼ばれる一種のアーケード街も、デパートの先駆的形態のひとつである。最初のパサージュとして知られるのは、

一七七九年の Passage des petits pères である。パサージュは王政復古期から七月王政期にかけて、パレロワイヤルからグラン・ブールヴァールにかけての一带に多数作られたが、⁸⁾現存するのは約二十カ所にとどまっている。こうしたパサージュは鉄骨とガラス屋根を特徴としており、両端には鉄柵が設けられて外部から遮断され、内部は豪華に内装されて、暖房設備やガス燈（パリで最初にガス燈がともされたのは、一八一六年、パサージュ・デ・パノラマの中の居酒屋であるという）なども備えられ、快適な遊歩空間を構成していた。

ジャンヌ・ガイヤールは、十九世紀前半の特徴的な商業スペースであるこれらのギャルリーやパサージュは、「閉じられた都市構造」に対応していると指摘している。⁹⁾それらは道路をいわば室内化し、商店と客の間に、親密な閉じられた空間を形成するのである。パリでまず最初に、これらのギャルリーやパサージュが人々の集まる場所となったのは、外の道路の整備が遅れていたからであった。すでにルイ・セバスティアン・メルシエの『タブロー・ド・パリ』をはじめ、さまざまな書物で指摘されているように、十九世紀前半のパリの不潔さは筆舌につくしがたいものだった。道路は一般に狭く暗く、人々が投げ捨てる汚物に満ち、下水溝はあふれ、悪臭がただよい、たまった汚泥の層は黒い埃となって空気を汚染していた。一部の比較的広い通りに歩道が取り付けられるようになったのは、一八二〇年代以降のことである。一方交通機関については言えば、パリ市内に最初に乗合馬車（オムニブス）が走ったのが、一八一八年（マドレーヌーバステイユ間）であり、その後次々と新路線が敷設されて、利用客も増加の一途をたどった。さらに一八一六年に始まるガス燈照明は、一八三〇年代になってようやく、パリの主要な盛り場でもされるようになり、ウインドーの中の商品にまばゆい輝きを与えるようになった。

このように都市の機能が少しずつではあるが整備されるにつれて、マガザン・ド・ヌーヴォーテの数も増えていったのだが、アンリ・ミトランは、七月王政下以前にできた店をその第一世代としている。¹⁰⁾その中には、ベル・ジャルディ

ニエール A la Belle Jardinière (一八二四年創業) やトロワ・キアルティエ Au Trois Quartiers (一八二九年創業) のように今日にいたるまでデパートとして存続しているものがあり、またコワン・ド・リュ Au Coin de Rue (一八二一年創業) のように、第二帝政下で大きく成長した店もあるが、多くはその後の社会的・経済的変動に生き残ることができなかった。いくつか有名な店の名前を挙げておくと、後のボン・マルシェの経営者アリストイッド・ブシコーが店員として修業時代を送るブチ・サン＝トマ Au Petit Saint-Thomas (一八一〇年創業)、やはり第二帝政下で繁栄するが一八六六年に百万フランもの借金を残して倒産したグラン・コルベール Au Grand Colbert (一八二八年創業)、ゾラがボヌール・デ・ダム百貨店のネーミングに示唆を受けたとされるパラディ・デ・ダム Au Paradis des Dames (一八四二年創業)、「パリでもっとも大きなマガザン・ド・ヌーヴォーテ」の歌い文句で開店し、とりわけ広告に力を注いだヴィル・ド・パリ A la Ville de Paris (一八四三年創業)、一八六九年になってパリではじめてエレベーターを設置したヴィル・ド・サン＝ドニ A la Ville de Saint-Denis (一八四五年創業) などがある。これらの店は、広い店内、明るい照明、豪華にディスプレイされた豊富な商品を持ち、すでに述べたように、正札、入店自由、薄利多売方式、返品・交換制などに加えて、生産地からの直接大量買い付けや大売り出し、カタログ販売などの方式を徐々に採用し始めていた。たとえば先に名前を挙げたコワン・ド・リュは、一八六四年に拡張改築したが、それは七階建てで六千平方メートルにおよぶ売り場面積を持っており、とりわけ建築学的な側面から見たパリのデパートの歴史を詳述しているベルナル・マレは、これを「パリで最初のデパート」と呼んでいるほどである。¹⁾

このように第二帝政下においてマガザン・ド・ヌーヴォーテは徐々にデパート(グラン・マガザン)へと変身を遂げていった。アンリ・ミトランが第二世代と呼んでいるのが、この第二帝政期に設立された店である。すなわち一般にパリ最初のデパートとして知られているアリストイッド・ブシコー夫妻のボン・マルシェ Au Bon Marché (一八五二年)、

アルフレッド・シヨシヤールのルーヴル Au Louvre (一八五五年)、ジュール・ジャルゾのプラタン Au Printemps (一八六四年)、エルネスト・コニヤック夫妻のサマリテーヌ A la Samaritaine (一八六九年) などである。しかしこの中でたとえバボン・マルシェは、一八五二年にブシコーが共同経営者となった時には、まだそれほど立派な店ではなかった。ジャンヌ・ガイヤールは、デパートが発展するのはとりわけ第二帝政期後半、つまり一八六〇年以降であると指摘している。彼女によれば、一八六〇年以前においては、資本は主として土地取用に乘じての土地の買い占めに投下されたのに対し、六〇年以降はそれが行き詰まって、行き場を失った大資本と野心家の商人とが結びついたという。そしてこのような大資本の投入によつてはじめて、マガザン・ド・ヌーヴォーテはデパートへと変貌したのであった。¹² ボン・マルシェのアリステッド・ブシコーが、ニューヨークのレストラン経営で大儲けしたマイヤールという人物から百万フランの融資を受け、共同経営者だったヴィドーから経営権と不動産をすっかり買い取つたのが、一八六三年のことであり、またルーヴルがルーヴル・デパート Grands magasins du Louvre と名前を変えたのが、一八六五年である。これら第二世代の店は、後にもう少し詳しく見るように、オスマンのパリ改造事業と密接に結びついた形で成長し、第三共和政下において堂々たる新館を完成させた。新館への改築年代をあげておくと、ボン・マルシェが一八六九―七二年および一八七二―七四年、ルーヴルが一八七七年、プラタンが一八八一―八三年、サマリテーヌが一八四一―五年のことである。これらの新館落成にいたつてようやく、いわゆる今日と同じ規模のデパートが完成したことになる。このようにマガザン・ド・ヌーヴォーテからデパートへの変化はきわめて漸進的なものであり、はつきりとした境界線を引くことはできない。そこでは、販売方式や店舗の大きさに加えて、扱う商品の多様性も重要なファクターを構成している。¹³ しかしここで確認しておきたいことは、一般によく言われているように、必ずしもブシコーがデパートを「発明」したわけではないということである。当時はすでに、多くの商店が同様の販売戦略を展開し始めていた。ブ

シコー夫妻の長所はおそらく、これらの戦略を総合的かつ徹底的に押し進めたことであり、またベルナール・マレの指摘によれば、彼らの新しい点は、とりわけ従業員対策にあったと言⁽¹⁴⁾う。つまり販売意欲を促進するために、固定給に加えて、ゲルト制と呼ばれる売り上げに応じた歩合制を導入したり、さらに従業員の教育や福利厚生の面でもさまざまな便宜をはかったことである。

いずれにせよ、第二帝政期、とりわけ一八六〇年代以降においてデパートは発生・成長し、続く第三共和政下で大繁栄時代を迎えたが、その基盤のひとつには、十九世紀前半とは比較にならないほどの、都市機能の面での整備があった。それは言うまでもなく、オスマンの改造事業の成果である。都市の美化、衛生化、治安、交通を焦点としたこの都市改造は、ジャンヌ・ガイヤールが適切に指摘しているように、パリをギャルリーやパサージュの「閉じられた(内向的な)都市」une ville introverrie から「開かれた(外向的な)都市」une ville extravertie へと変貌させたのだ⁽¹⁵⁾った。

(2) オスマンのパリとデパートの関連

オスマンのパリ改造はどのような都市景観を作り出したのか。それをよく示しているものとして、『獲物の分け前』の中の次のような一節を引用しておきたい。これはサカールの妻ルネとその義理の息子マクシムのカップルに関わる描写だが、彼らは小説の中で、いわば改造後の「新しいパリ」を代表するような存在として示されている。

恋人たちは新しいパリを愛していた。彼らはしばしば馬車で町を走り、自分たちが特別に好きなくつかの大通りを通るために回り道をした。丈の高い、彫刻をほどこした大きな扉を持ち、バルコニーに覆われ、大きな金文字で名前や看板や社名のきらめいている家々は、彼らをうっとりさせた。クーベ「二人乗り四輪の箱馬車」が走って

いくあいだ、彼らは、ベンチャ色とりどりの広告塔や細い樹木のある幅の広い果てしない歩道の灰色の帯を、親しげな眼差しで追っていた。地平線の端へと向かいながらしだいに小さくなり、何もない青みがかった四角へと開いているこの明るい貫通路、店員たちが女性客に微笑みかけているデパートの、とぎれることのない両側の列、ざわめきうごめいている群衆の波は、彼らをしだいに絶対的で完全な満足感でいっぱいにし、都会生活のすばらしさの感覚で満たした。「……」彼らは走り続けた。すると彼らには、馬車が、このまっすぐで果てしない車道に沿って、まるで絨毯の上を走っているかのように思われた。その道路は彼らが暗い路地を通らずにすむためにだけ作られたものだった。大通りの一本一本が、彼らの館の廊下になった。陽気な太陽の光が、新しい建物正面の上で微笑み、窓ガラスを明るく照らし、小売店やカフェの日除けに跳ね返り、群衆がせわしげに行き交う足元のアスファルトを暖めていた。¹⁶

この描写においては、まっすぐで無限に続くかと思えるような新しい大通りと整備された歩道、両側に立ち並ぶデパートや商店、そして通りにあふれる群衆といった改造後の新しいパリの情景が描き出されている。当時一般には、オスマンの改造事業は、古いパリのピトレスクな景観を破壊し、あまりにも直線的で幾何学的すぎる空間を作ったとして非難されていたのに対し、別論文でも指摘したように、ゾラは直線のパリ、広々とした新しい大通りの作り出す都市の景観に、強く惹かれていたようである。¹⁷

この引用文においては、オスマンの都市改造が商業の発展のためにもたらした変化を、いくつかの点で読みとることができる。ひとつは、ジャンヌ・ガイヤールがデパート発展の基本的条件として挙げている「道路の〈道德化〉」*“moralisation” de la rue* に関する問題である。上記の引用では、新しい大通りは彼らが「暗い路地 *les ruelles noires*

を知らずにすむためにだけ」作られたとある。ガイヤールが指摘しているように、十九世紀前半までのパリにおいて、道路はブルジョワ階級以上の「しかるべき人々」*honnêtes gens* にとって必ずしも安全な場所とは言い難かった。それは民衆の生活の場であり、繁華な路上には物売りや露天商があふれて「恒常的な市 *foire*」の様相を呈し、汚染や犯罪の温床ともなる無秩序な空間を構成していた。オスマンの改造は、見通しが良く明るい陽光の降り注ぐ幅の広い通りを作っただけでなく、歩道や街路灯、上下水道の整備を行って、衛生的で安全な都市環境を作った。さらに路上販売の規制や新しく制度化された警察官 *les sergents de ville* による巡回などで、それを補強した。そしてこのような都市環境の整備と期を一にするかのようにして、道路には「完全にブルジョワではなくとも少なくとも文明化された顧客」*une clientèle sinon bourgeoise du moins policiée*、もしくは将来デパートの顧客となるべき「無名の公衆」*un public anonyme* の群れが出現することになったのである。

次に注目したいのは、「大通りの一本一本が彼らの館の廊下になった」*Chaque boulevard devenait un couloir de leur hôtel* という記述である。これは先の指摘と関連するが、道路が整備され「文明化」されることによって、ルネとマクシムのような新興の上流ブルジョワジーにとっても、馬車で容易に移動できる大通りは、家の外部ではなく家の延長として意識されるようになったことである。さらに言えば、大通りに面した商店へ行くことは、館の中でひとつの部屋から少し離れた別の部屋へと移動するのと変わりが無いことになる。ここにはもちろん、交通の便利さの問題があり、自家用の馬車を持たない人々でも、乗合馬車の発達や辻馬車の増加により、市内での移動がきわめて容易になったことがある。このことは『ボヌール・デ・ダム百貨店』の中で、ムーレがデパートの女客たちについて、「このご婦人方はばくの店にいるんじゃないやなくて、自分たちの家にいるんだ」*ces dames ne sont point ici chez moi, elles sont chez elles* (p.625) と述べていることとも関連するだろう。交通の発達は、婦人たち

にとつてデパートをきわめて身近な存在にしたのである。

もうひとつ指摘しておかなければならない重要な点は、ルネとマクシムのカップルが、箱馬車の窓から見える街並みを目で楽しんでいっているということである。つまり商店の立ち並ぶ街路自体が、ひとつの新しいスペクタクルとして成立するようになったのであり、彼らはブローニーの森を馬車で散歩するのと同じ感覚で、新しい大通りを馬車で走っているのである。ここでは、シベルプシュが鉄道旅行の車窓風景に関して指摘したのと類似した「パノラマ的知覚」

(速度によつて近くの前景が消失してしまふ)ことで、見る人が、自身風景の中の一部であることをやめ、対象をタブローとして、あるいはシーンの連続として知覚するようになること)が、都市の中にも出現していることが読みとれる。シベルプシュは、デパートもまた、同様の「パノラマ的知覚」の発生を促したことを指摘し、「古いタイプの小売店から百貨店に代わる過程で、商店に対する客の知覚も、馬車から鉄道に移つた頃の旅行者の知覚と同様に、またパリのオスマン化によるパリ住民の知覚と同様に、変化する」と述べている。⁽²⁰⁾シベルプシュはこうした変化をもたらず「速度」は、デパートの場合、商品の売り上げの加速、すなわち大通りの交通とも結びついた大量の客と大量の商品の回転によつて生み出される経済的速度のことだと言う。この指摘はもつともであるが、その理由として「百貨店内にはパノラマ的に見られる風景も大通りもなく、見えるのは商品なのだから、パノラマ的という概念は見方を変えて考えなければならぬ⁽²¹⁾」と述べているのは、適切さを欠くように思われる。なぜなら新しい形態の商業においては、ショーウィンドーに端的に表れているように、商品自体がスペクタクルとなつたからであり、ウィンドーからウィンドーへ、売場から売場へと移動する客の視線は、明らかに商品を「刹那的に、印象派的に、つまりパノラマ的に」体験するものだからである。オスマンの都市改造は、都市の景観自体をひとつのスペクタクルとするものであったが、デパートは商品の世界をスペクタクルにするものであったという点で、両者はひとつの共通項を持つと言えるだろう。ジャンヌ・ガイヤールも述

べているように、一八五〇年代以降のパリにおいてほど、「見せる」ことが重視された時代はなかった。⁽²²⁾そこでは帝国の威信を内外に誇示する万国博覧会の連続開催のかたわらで、商人たちもまた、商品の「展示」に腕を競い合ったのである。この時代の重要なキーワードのひとつが「エクスポジション」(フィリップ・アモン)⁽²³⁾であることは確かであろう。

(3) 『ボヌール・デ・ダム百貨店』の構想

ゾラは、すでに「序」において述べたように、一八六八年の《ルーゴン・マカール叢書》構想の当初から、デパートを主題にした小説を書きたいという意図を持っていた。実際彼は、一八五八年の二月に十八歳でパリにやってきて以来、この種の商法の急成長ぶりに、つねに注目していたにちがいない。それはまさに、デパートが名実ともに誕生しつつある時代であった。デパート小説執筆の意図が明確になるのは、一八七一一七二年に作成された第二の小説リストにおいてである。ここでは全部で十七巻の小説が予定されているが、そのうちの第十巻目に「高級商業についての小説(流行品)―オクターヴ・ムーレ」Le roman sur le haut commerce (nouveltes)―Octave Mouret という記述があり、この時点で主人公の名前も決定されている。そして第四巻『ブラッサンの征服』(一八七四)においては、マカールの血筋を引くフランソワ・ムーレとルーゴンの血筋を引くマルト・ムーレという、いとこ夫婦の長男としてオクターヴを登場させ、父親がバカロレアに失敗した息子をマルセイユの商店に入れるというエピソードを導入して、後の小説のための布石を敷いている。

しかしながらゾラが実際に小説執筆のための準備にはいるのは、一八八〇年代になってからのことである。一八八〇年二月五日、第九巻『ナナ』の連載終了の日に『ヴォルテール』紙の編集長ラフィットは、次作はデパートを舞台にした小説であることを発表する。しかし一八八〇―八一年にゾラを襲ったペシミズムの影響からか、彼が次に取りかかっ

た小説は、当初予定されていなかった『ごった煮』（一八八二）であった。この小説の主人公はやはりオクターヴ・ムーレである。ここにおいてオクターヴは南仏からパリに上京してきた二十二歳の青年で、後の百貨店の前身であるマガザン・ド・ヌーヴォーテ「ボヌール・デ・ダム」に主任店員 premier commis として就職する。この小説においては、オクターヴの寄宿する建物に住むブルジョワ階級の人々の、私生活における腐敗と偽善性を辛辣に描き出すことに力点が置かれており、オクターヴ自身も多分にシニカルで好色な青年としてその感情教育的側面が強調されていて、商業の問題は副次的にしか扱われていない。しかし後述するように、『ごった煮』においてはすでに、ボヌール・デ・ダム百貨店の前史が語られている。

ゾラが『ボヌール・デ・ダム百貨店』を執筆したのは、一八八二年から八三年にかけて、つまりボン・マルシェとルーズルに続いて、プランタン百貨店も新館を完成させつつあった時期のことである。この時点においては、現実のパリのデパートはようやくその完成段階に達しており、ここにおいてゾラは、歴史的にも、マガザン・ド・ヌーヴォーテの発生からデパートの完成にいたるほぼ百年の道のりを概観する位置に達していたと言える。小説の執筆にあたってゾラがおこなった取材調査は、関連する新聞記事の切り抜きの他に、実際のデパート探訪（ほぼ一ヶ月間にわたって、毎日午後の五六時間、ボン・マルシェやルーズル、あるいはゾラ夫人がひいきにしていたプラス・クリシーを訪れ、さまざまな部門を見学）と何人かの情報提供者からの取材を中心とするものである。管理経営の面では、ボン・マルシェとルーズルそれぞれの管理職にある人物から取材して、両デパートについての詳細な資料を作成、また店員の生態などについては、ルーズルの元会計主任、ボン・マルシェの売場主任、そしてサン・ジョゼフの女店員の三名から聞き取り調査をおこなった。また友人の建築家フランツ・ジュルダン（彼は後にサマリテーヌ新館の設計を担当することになる）からは、デパート建築のプランについて意見を求めている。これらの情報提供者たちは、執筆の間中もゾラに協力を惜しま

ず、ゾラが「これほどに多様で献身的で豊富な資料調査の恩恵に浴したのをはじめて」⁽²⁵⁾であるほどだった。

ゾラがポヌール・デ・ダム百貨店を構想する上でもっとも影響を与えたデパートは、なんといってもボン・マルシェとルーヴルであろう。しかしたとえば店名については、すでに述べたようにバラディ・デ・ダムから示唆を受けた可能性が高いし、⁽²⁶⁾地理的な場所については、後述のように、マガザン・ド・ラ・ペというデパートがモデルになっている。またデパートの経営者が女店員と結婚するという筋書きについては、コワン・ド・リュの経営者ラリヴィエールが、自分の店の下着売場主任の女性と結婚した例をはじめ、いくつかの類似例があった。ゾラが『ポヌール・デ・ダム百貨店』において描こうとしたのは、ひとつの典型としての「デパート」なのであったが、そこではデパートの拡張とオスマンの改造との関係も、もっとも典型的な形で小説化されていると思われるのである。

2 ポヌール・デ・ダム百貨店の拡張とオスマン計画の利用

(1) 『こった煮』から『ポヌール・デ・ダム百貨店』へ

それでは小説の中におけるパリ改造とデパートの関係を具体的に見ていくことにしたいが、最初にまず、『こった煮』から『ポヌール・デ・ダム百貨店』にいたるこの店の歴史を簡単にまとめておこう。

ポヌール・デ・ダムは一八二二年、ドゥルーズ兄弟 Les Frères Delauze によって創立されたということになっている。この創立年代は、実際にいわゆる第一世代のマガザン・ド・ヌーヴォーテが多く出現しはじめた時期に対応している。しかしこの創立当初の店は、ポーデユ夫人の思い出によれば、「ヌーヴ・サンリトールギュスタン」通りに面して、

ほんの衣装戸棚ほどのウインドーがひとつあるだけで、そこにはインド更紗が二反とキャラコが三反、窮屈そうに詰め込まれて」おり、「店はあまりにも狭くて向きを変えることもできないほど」(p.412)であった。

『こった煮』の冒頭部は、草稿のプランでは一八六一年十月に設定されている(決定稿では年代は削除されている)。ここで南仏から上京してきた青年オクターヴ・ムーレは、このマガザン・ド・ヌーヴォーテに店員として入ることになるが、このときには、創立者ドゥルーズ兄弟の兄のほうはすでに二年前に死亡し、その娘のカロリーヌが元店員(註)のシャルル・エドゥーアンと結婚して、この若夫婦が実質的に店を切り盛りしていた。場所は「ヌーヴサンクトーギユスタン通りとミシヨディエル通りの角」で、店の入り口は「ガイオン広場の狭い三角形」に面していた。看板には「金メッキのはげた大きな文字」で「オ・ボヌール・デ・ダム、一八二二年創立」とあり、ショーウインドーのガラス板には赤で「ドゥルーズ、エドゥーアン商会」という社名が書かれていた。オクターヴをはじめてこの店に案内してきた建築家のカンパルドンは、「ここには当世風の小粋な le chic moderne はなくけれども、正直で堅実だ *c'est honnête et c'est solide*」と説明する。オクターヴの目にはじめて映った店は「薄暗く、狭く、地下室からあふれて隅の方に積み重ねられた商品でいっぱいになっており、商品包みの高い壁のあいだには、ごく狭い通路しか残されていなかった」。しかしここでエドゥーアン夫人カロリーヌは「店の生き生きとして均衡のとれた魂」として、穏やかにしかし威厳を持って立ち働いていた (pp.15-17)^(註)。

この『こった煮』の第一章においては、すでに「株式取引所前広場から新オペラ座まで、広い通りを通す」話がカンパルドンによって語られており、将来のボヌール・デ・ダムの拡張の伏線を構成している。ゾラが描いた自筆の地図からもわかるように、この店は最終的に、ミシヨディエル、ヌーヴサンクトーギユスタン、モンシニーの各通りと、新街路である十二月十日通り(現在の九月四日通り)に囲まれた区画いっぱいを占めるにいたるからである。

店の売り上げは好調で、もつと店が広げればとこぼすエドゥーアン夫人に対し、オクターヴは拡張の計画を持ちかける。それは「ヌーヴサンクトーギュスタン通りに面した隣の家屋を買い取り、バラソル屋と雑貨屋を立ち退かせて店を拡張し、そこに広い売り場を作る」というものだった。

彼の話は熱を帯び、湿っぽくて薄暗く陳列もない店の奥で営まれる古い商売に対する軽蔑をあらわにし、新しい商売、つまり水晶の宮殿 *palais de cristal* の中に女性のあらゆる贅沢品を積み上げて、正々堂々と何百万もの金を動かし、夜には王侯貴族の盛大な祝祭 *une fête de gala princier* のように光り輝く商売を、身ぶりをまじえて描いて見せた。

「水晶の宮殿」という表現は、もちろん、一八五一年の第一回ロンドン万博の会場となったガラスの殿堂、クリスタル・パレスを想起させる。この「宮殿」の比喩、そして「祝祭」としての空間構成は、後の『ボヌール・デ・ダム百貨店』で十全に開花する主題である。エドゥーアン夫人は、頭脳明晰で、新しいパリに対する女らしい直感も備えていた女性で、オクターヴの考えに心の底では共鳴していた。しかし以前から夫人に対して下心を抱いていたオクターヴは、彼女を誘惑しようとし、あくまでも冷静で聡明な夫人は彼を穏やかに退けたために、オクターヴは居心地が悪くなって店をやめてしまう (pp.171-173)。

オクターヴは次に店員として雇われた絹物店オーギュスト・ヴァブルの店でも、店主の妻のベルトとの関係が発覚して店にいられなくなったが、翌日それを知ったエドゥーアン夫人は自分の店に戻ってくるようにと誘い、話はすぐさまとまる。彼女は喪服を着ていた。病弱だった夫のエドゥーアン氏が亡くなったのだった (p.314)。

数カ月後、ちまたではオクターヴとエドゥーアン夫人の結婚が近いことが噂されていた。しかし事はそれほど簡単に運んだわけではない。女性関係では失敗を重ねていたオクターヴは慎重になり、もはやエドゥーアン夫人を誘惑しようという考えは捨てていたが、活動的で商才に富んだ彼は、店の中でしだいに重要な立場を占めるようになっていた。彼はふたたび店舗拡張の夢に立ち戻る。エドゥーアン夫人は、オクターヴの才能にますます大きな共感を抱くようになっており、「愛想のいい店員の慇懃な外観の下に、まじめで実際的な本性」を見いだすとともに、彼女自身には欠けている「炎」「大胆さ」すなわち「商業におけるファンタジー」*la fantaisie dans le commerce*を認めて感服していたのだ。ある夜彼女はオクターヴに、ドゥルース叔父が承諾したので、隣家を買取ることにしたことを告げるが、このように商売を拡張するのならば、自分は再婚しなければならぬと言う。オクターヴは最初とまどったが、夫人の考えている相手が自分であることを知って感激する。エドゥーアン夫人はあくまでも冷静で、オクターヴによく考えられるようにと頼む (pp.339-341)。

二人はエドゥーアン夫人の八カ月間の喪が明けた十一月のはじめ「草稿では一八六三年」に結婚した。ポヌール・デ・ダムはますます繁盛し、店を拡張して絹物の売場を作り、そのためにオーギュスト・ヴァブルの店は苦境に陥っているとうとうところで、この話は終わっている (p.375)。

『こった煮』において語られるポヌール・デ・ダム百貨店の前史は、以上のようなものである。この小説においては、すでに述べたように商業の問題は副次的にしか扱われておらず、上記の筋書きも断片的なものであるが、ゾラが次作に向けて、着実に下地を作っていることがわかる。

次作の『ポヌール・デ・ダム百貨店』では、この店は冒頭「草稿では一八六四年十月に設定されているが、やはり決定稿では年代は削除されている」からその怪物的な様相をあらわにする。ここでノルマンデイの田舎町からパリに出て

きた二十歳の娘ドゥニーズ・ボーデュ（これは『ごった煮』の冒頭でオクターヴ・ムーレが南仏からパリに出てきたのと対をなす構成である）は、あふれんばかりの商品と華麗に飾り付けられたショーウィンドーに心底から魅惑されるのである。『ごった煮』においてすでに一度拡張していたこの店は、『ポヌール・デ・ダム百貨店』の冒頭までのあいだに、またしても拡張している。その描写を少し引用しておこう。

それはミシヨディエル通りとヌーヴ・サン・トールギュスタン通りの角にあるマガザン・ド・ヌーヴォーテで、その陳列は十月の穏やかで白っぽい日差しの中で色鮮やかな色調に輝いていた。『……』ガイヨン広場に面して切り取られた面には、金泥を塗った複雑な装飾に囲まれて、全部ガラスでできた背の高い扉が、中二階まで達していた。『……』それからショーウィンドーがミシヨディエル通りとヌーヴ・サン・トールギュスタン通りに沿って奥の方へと続き、角の建物だけでなくさらに右に二軒、左に二軒、あわせて四軒の建物までも占めていた。それらは最近買い取って改修したものだった。その連なりは、パースペクティヴの広がりの中で、彼女（ドゥニーズ）には無限に続くかに思われた。一階には陳列が並び、中二階では板ガラスを通して中の売場の様子がすっかり透けて見えた。上の方では、絹の服を着たひとりの女店員が鉛筆を削っており、彼女のそばでは別の二人の女店員が、ピロードのコートを広げていた。（p.390）

このようにしてドゥニーズは、ガラス越しに一種の理想像として、自らの将来の姿を垣間みることになるのだが（ここでのガラスの機能はショーウィンドーの機能と共通する）、この描写における建物の遠近法的見通しは、オスマンの都市計画の持つ特徴と重なり合うものであることに注目しておきたい。

このようにポヌール・デ・ダムはまた拡張したわけだが、その工事の最中に、視察に来たエドゥーアン夫人は、穴の中に転落して死去したのだった。ドゥルーズ叔父もすでに死んでいたもので、店はムーレひとりのもものになっていた（『こった煮』では主に「オクターヴ」と呼ばれていた主人公は「ポヌール・デ・ダム百貨店」では「ムーレ」という名前で呼ばれることが多いので、われわれもそれに従うことにする）。

（2）アルトマン男爵と「不動産銀行」

オスマン計画に乗じてのムーレの野望が明らかになるのは『ポヌール・デ・ダム百貨店』の第三章である。彼は上流ブルジョワのデフォルジュ夫人という未亡人を愛人に行っていたが、それは彼女の保護者である不動産銀行 *le Credit Immobilier* の頭取アルトマン男爵 *le baron Hartmann* に近づきたいという思惑からだった。なぜなら不動産銀行は、十二月十日通りの工事を請け負う代わりに、新街路沿いの土地の所有権を持つことになっていたからである。ムーレは三年ほど前から（つまり『こった煮』の当初から）この新街路の工事を心待ちにしていた。最初はそれが地区全体の商売の動きを活発にしてくれるだろうという予測からであったが、しだいに店舗拡張の夢は広がり、彼はポヌール・デ・ダムが「新しい道路に沿って宮殿のような正面を持ち、征服された都市の主人となって君臨している」（p.455）さまを夢想するようになった。

「アルトマン男爵」*le baron Hartmann* と「う名前は明らかに「オスマン男爵」*le baron Haussmann* を想起させる名称である。小説中のアルトマン男爵は「六十歳ぐらいの老人」で「小柄で頑丈で、アルザス人の大きな頭を持ち、鈍重そうな顔をしていたが、口もとのわずかな皺や瞼のほんのちよつとした動きに、知性の炎がきらめいた」（p.107）と描写されている。実際のオスマン男爵の方は、一八〇九年生まれで一八六九年には六十歳、アルザス人の家系である

ことも共通しているが、身長は一メートル九十センチあり、「小柄」というのはあてはまらない。⁽²⁹⁾ 何よりも小説中のアルトマン男爵の方は政治家でも高級官僚でもなく、銀行の頭取である。したがってこの点から見れば、アルトマン男爵のモデルは、むしろ「動産銀行」*le Crédit mobilier*の設立者であるポルトガル出身の金融家ペレール兄弟 (Emile Pereire 一八〇〇—一八七五、Isaac Pereire 一八〇六—一八八〇) ではないかと考えられる。

ペレール兄弟は若い頃サンシモン主義の洗礼を受け、その経済・産業思想に共鳴し、早くから鉄道建設に目を付けて、北鉄道、パリリヨン鉄道をはじめ、フランスの主な鉄道事業を独占した実業家である。⁽³⁰⁾ 一八五一年には、やはりサンシモン主義に共鳴していたリイナポレオンに同調し、一八五二年、第二帝政開始の年に、その後の事業の牽引力となる「動産銀行」の設立を許可される。オスマン知事による改造事業が開始されるや彼らは不動産事業に乗り出し、「リヴォリ通りホテル・不動産株式会社」*la Société anonyme de l'hôtel et des immeubles de la rue de Rivoli*を設立する。この会社は、一八五三年から五五年にかけて工事がおこなわれたリヴォリ通りのルーヴルと市役所のあいだの区間に沿って、豪華な建物を建設することを目的とした。とりわけ一八五五年の万博開催を目指して、パリには国際的な大ホテルがないことに気づいたナポレオン三世の依頼により、ルーヴル宮の斜め向かいに大きなホテル (Grand-Hotel du Louvre) を建てる工事を請け負ったが、この建物の一角を占めたのが、ボヌール・デ・ダム百貨店のモデルのひとつでもあるルーヴル百貨店 (一八五五年七月、ホテルに約三ヶ月先立って開店) である。ルーヴル百貨店の創立者であるアルフレッド・ショシャール (Alfred Chauchard 一八二二—一九〇九) は、近くのマガザン・ド・ヌーヴォーテ「ポーヴル・ディアブル」*Pauvre Diable*の店員をしていたが、ホテルの工事中にここにデパートを作ることを思いつき、社長のペレールに申し入れて許可されたのだった。

ムーレとアルトマン男爵の関係は、このショシャールとペレールの関係に近いものがある。すでにデパート誕生の歴

史について書いた際に確認したように、マガザン・ド・ヌーヴォーテがデパートへと変身するためには、すぐれた商才と大資本とが結びつくことが不可欠であった。実際小説の中で、ムーレがアルトマン男爵に申し入れるのは共同事業であり、男爵が「巨大な宮殿」であるデパートを建て、ムーレがその商才とすでに作り上げた営業財産 *le fonds du commerce* を提供するというものだった。またゾラ自身が情報提供者から得た資料 (*Notes Beauchamps*) の中で、*シエ* シャールとその共同経営者エリオをペレールに推挙したのは、ペレールと親しいあるイギリス人の愛人であったドウラエー夫人 *Madame Delahaye* なる人物であることが書き留められている (F. 203) が、小説中でこの役割を果たしているのは言うまでもなくデフォルジュ夫人である。

ペレール兄弟の「リヴォリ通りホテル・不動産会社」はその後四年足らずのうちに「不動産会社」*la Compagnie immobilière* と名称を変え、オスマン計画の進展にともなって、パリ市全域に活動の範囲を広めた。特にオペラ座周辺やシャンゼリゼのロンポワン周辺、レオミュールセバストポールの交差点などの戦略的な地区で、彼らは土地を買いあさり、建設工事をし、それを交換したり転売したりすることで多額の儲けを得た。モンソー公園地区を開発したのもペレール兄弟である。一八六二年にはこの会社の所有する不動産の総額は、ほぼ一億フランに達したという。彼らはさらにフランスの地方や外国にも多くの会社を設立し、活動を広げていったが、一八六三年頃からその勢いにもかげりが見えはじめ、一八六七年に「動産銀行」と「不動産会社」はついに倒産する。

ゾラの小説中の「不動産銀行」*le Crédit immobilier* とは、このペレール兄弟の「動産銀行」*le Crédit mobilier* と「不動産会社」*la Compagnie immobilière* (通称 *l'Immobilier*) を合体させたものであると考えると間違いないだろう。兄弟の事業の中心にはつねに「動産銀行」があり、不動産事業と銀行とは密接に結びついてきたからである。そしてアルトマン男爵とオスマン男爵の「不動産銀行」という設定は、パリ改造事業における政治家もしくは官僚と金融・不動

産業者との緊密な結びつきを、暗黙のうちに示すものではないだろうか。ムーレはアルトマン男爵に対し、素朴なふりを装いながら、「あなたは彼ら〔行政〕に、下水道も歩道もガス燈も備えた完全な道路を引き渡されるのですね。そしてその補償金として、道路沿いの土地をもらうだけで十分なのですか？ 奇妙だ、じつに奇妙な話だ」と言う。実際、新街路を作るためにパリ市が用いた方式には、市が直接、用地の取用や工事などを執行する公営方式（*à l'Hotel*）とそれらを民間業者に委託する払い下げ方式（*la concession*）があったが、改造のための十分な予算を持たなかったパリ市は、しだいに後者の方式を取ることが多くなっていった。すなわち市は道路の計画を立て、実行を監督するだけで、土地取用や工事の費用は払い下げを受ける業者が前もって負担し、その後新街路沿いの土地を転売することで利益を上げることが期待されたのである。しかしこの方式は、業者にあまりにも多くの負担を強いるために、市は契約の際に補助金（*subvention*）をつけることを余儀なくされ、それは借金や *Bons de caisse* または *Bons de délégation* と名付けられた債権でまかなわれた。こうしてパリ市の負債は莫大な額にふくれあがっていくことになるのである。³¹

一方、多大のリスクを冒す業者の方は、補助金以外にもさまざまな特典を蒙っていた。新街路沿いの土地を有効に利用することもそのひとつである。アルトマン男爵はまさにボヌール・デ・ダム百貨店が拡張をねらっている土地に、「グラン・ホテル」*Grand-Hôtel* に競合するような大きなホテルを計画し、すでにそのための用地の買収を始めていた。ムーレがアルトマン男爵と早く会う必要を感じたのは、まさにその計画を察知して恐れを抱いたからであり、そのためには直接事務所に面会に行くよりも、「ひとりの女性を介しての好意的なつながり」*le lien aimable d'une femme* を利用しようとしたのだった。なぜならムーレは「共通の愛人を持っていることがどれほど互いを近づけ、心をなごませるか」を知っていたからである。アルトマン男爵は、デフォルジュ夫人が自分に推薦してくる有望な青年がすでに三人目であることに少々うんざりしながらも（彼女はムーレに捨てられた後、今度はボヌール・デ・ダム百貨店の元店員プー

トモンを男爵に推薦して、ライバル百貨店の設立に助力することになる)、ムーレの商才と女性たちを惹きつける魅力に心を打たれて、検討を約束する。

以上に述べた小説中のエピソードは、パリの近代化を推し進める上で、市当局と銀行、不動産業者、そして企業家とが一体となった癒着の構造を持つていたことを示している。そこには情報を知っている者同士の間でさまざまな裏取引があった。しかし『ボヌール・デ・ダム百貨店』において、ゾラはこうした癒着の構造をそれほど風刺的には描いていないように思われる。アルトマン男爵は経験豊かな人物として、デフォルジュ夫人に対してもムーレに対しても「父親のような様子」*air paternel*で接しており、とりわけムーレの才能を率直に評価していた。このような構造は、むしろ近代を構成する父権主義的メカニズムの一環として、ありのままに提示されていると言えるだろう。

(3) ファサッドの重要性

『ボヌール・デ・ダム百貨店』におけるこのデパートの拡張に話を戻そう。小説の第八章ではいよいよ十二月十日通りが着工し、立ち退きと取り壊し工事が始まると同時に、ボヌール・デ・ダムも拡張工事に取リかかった。アルトマン男爵と「不動産銀行」は、まだ新街路沿いの土地にホテルを建てる計画を持っていたので、その部分を除き、ミシヨディエール、ヌーヴ・サン・トーギュスタン、モンシニエの三本の通りに挟まれた区画いっばいに店舗を広げることになった。ムーレは次々と近隣の家屋を買収していったが、ただひとり、傘屋を営むブーラ老人だけが断固として立ち退きを拒否していた。工事は昼間だけでなく、夜間も電気照明をつけて行われるようになり(ルーヴル百貨店およびホテルが初めて夜間照明下の工事を行ったという)、ボーデュ家をはじめ近隣の人々は夜も眠れなくなる。第九章でいよいよ新しい建物は完成し、記念セールが行われる。新しい豪華な正面入り口 *porte d'honneur* はヌーヴ・サン・トーギュスタ

ン通りに面し、建物は鉄とガラスを多用した近代的なものだった。しかし新街路沿いの土地を手に入れられないことで、ムーレの不满は残っていた。

それだけで彼の勝利を台無しにするのに十分だった。彼は征服を完全なものにし、そこに至上の栄光 *apothéose* として、記念碑的な建物正面を建てたいという欲求にさいなまれていた。正面入り口が、ヌーヴ・サン・トーギュスタン通りという古いパリの暗い通りにあるかぎり、彼の作品は不具で、論理を欠いていた。彼はそれを新しいパリの前に、明るい陽光のもとで世紀末の群衆が通る若い大通りのひとつに、誇示 *afficher* したいと思っていた。

彼はそれが商業の巨大な宮殿 *le palais géant du commerce* として周囲を圧し、古いルーヴル宮殿よりも大きな影を都市の上に投げかけるさまを夢見ていた。(p.687)

ムーレは新しいデパートをつねに「宮殿」として夢想していたが、ここではそれが古いパリの中心であったルーヴル宮殿に対抗する新しいパリの中心としての宮殿であり、また貴族の消費に対する新しいブルジョワの消費の殿堂であることがわかる。新しい宮殿は新しいパリに面さなければならぬ。新しいパリとは新しい大通りのことである。ムーレの「論理」は明白であった。ムーレはついにアルトマン男爵を説き伏せることに成功する。小説の最終章では、十二月十日通りの開通、「古いサン・ロック地区の湿っぽい影を切断するこの光の貫通路」 *cette trouée de lumière qui coupait l'ombre humide du vieux quartier Saint-Roch* の完成とともに、ボヌール・デ・ダム百貨店も念願の大通り進出を成し遂げる。「宮殿は建てられた」。それは「モードの浪費の狂気に捧げられた神殿」 *le temple élevé à la folie dépensière de la mode* であった。こうでようやくボヌール・デ・ダムは古いパリと決別する。

それはあたかもその巨人が、次々と拡張をはかったあとで、暗い地区に恥ずかしさと嫌悪を抱き（そこで彼は質素に生まれ、後にはその喉を掻き切つて殺したのだったが）、それに背を向けて、狭い通りの泥を尻に残し、新しいパリの騒々しく陽光に満ちた大通り *la voie tapageuse et ensoleillée du nouveau Paris* にその成り上がりの顔 *sa face de parvenu* を向けたかのようだった。(p.763)

新しいパリは何よりも「光」に満ちあふれた空間として、「太陽」に照らされた向日性の空間として提示されている。

これはジャンヌ・ガイヤールが、オスマンのパリ改造は、「内向的な都市」*une ville introvertie* から「外向的な都市」*une ville extravertie* へと転換したと指摘していること(註)と関連する。ここではもはや、パサーージュの時代のように、道路を飼ひ慣らし、室内化することが問題ではなかった。むしろ逆に、内部を外部に向かつて開くことが問題となったのである。その意味では、ポヌール・デ・ダムの隅々にまで騒音と群衆と活気を求めるムーレが、「もしその方法が見つかりさえすれば、店の真ん中に道路を通したことだろう (p.614)」という一文は、きわめて示唆的である。ところでムーレが大通りに面した建物正面フアサッドに固執したのは、「六台の馬車がゆつたりと走れる幅の広い通り」によって多くの客が期待できるからというだけではなかった。つまりただ単に「交通」だけが問題ではなかったのである。それはとりわけ「広告」*réclame* としての価値を持っていた。先の引用にあったように、ムーレは自身の作品を新しいパリの前に「貼り出し」*afficher* たいと望んでいたのである。これまでも彼は、あらゆる種類の広告に巨額の出費を惜しまなかったが、「今後は、その前で人々が押し合いへし合いしているこの建物正面フアサッドが、雑多な色をして金泥を塗ったバザールのような豪華さ、婦人物衣料の詩をそっくり展示するための大きなショーウインドー、おびただしい看板「……」

によつて、生きた広告「la réclame vivante」となつた (p.481)」。われわれはすでに、オスマンのパリとデパートの發展についての一般的考察の中で、両者がともに都市や商品をスペクタクルにするものであること、そこでは「見せること」「展示すること」が重要な要素を構成していることを確認したが、ボヌール・デ・ダム百貨店の建物正面^{ファサード}はまさにそのような機能を持っていた。そしてこの新店舗の落成記念として開催されたのが、「白物市」*exposition du blanc*と呼ばれる「エクスポジション」だったのである。

3 十二月十日通りの意味

二つの小説を通してボヌール・デ・ダムは、以上に見てきたような發展をたどつたわけだが、ここでわれわれは、なぜゾラがこの百貨店を現実のパリのそのような地理的場所に位置づけたのか、オスマンのパリ改造計画によつて作られた数多くの新街路の中でもなぜ「十二月十日通り」*Rue du Dix-Décembre*を選んだのかという問題について考えてみたい。

擴張を終えたボヌール・デ・ダム百貨店の地理的な位置は、一八六九年四月三十日、十二月十日通りの工事中に新しく開店した実在のデパート、「マガザン・ド・ラ・パクス」(*Aux Magasins de la Paix*, または *A la Paix*) の場所と正確に一致している。この店を設立したのは、ファレ *Faré* という、もとフォーブール・モンマルトル通りのア・ラ・ベル・フランセーズの経営者とその甥のゲラン *Guérin* である。ファレは、一八五五年にシヨシヤールとエリオがルーヴル百貨店を設立した際に多額の資金を出して共同経営者となつたものの、一年目の利益の少なさに驚いて出資金を引き

上げてしまった人物でもある。マガザン・ド・ラ・ペは、開店前の二月頃から大がかりな宣伝を始め、パリ中に配達馬車を走らせたりしたこともあって、初年度の売上げが八百万フランという素晴らしいデビューを飾ったが、次第に経営が悪化し、十三年後の一八八一年には閉店に追い込まれたという。³³したがってゾラが本格的に『ボヌール・デ・ダム』の構想を練り始めたとき、マガザン・ド・ラ・ペはちょうど姿を消したことになる。

これら実在と虚構の二つのデパートの類似点については、ジャンヌ・ガイヤールが簡単にまとめているが、地理的場所以外にも、開店の時期（どちらも一八六九年）、開店時の華々しい宣伝、建物の建築様式などに類似性が見られる。

とりわけマガザン・ド・ラ・ペの開店当時に書かれた次のような記事の一節は、ゾラが「大聖堂」^{カテドラル}にもたとえたボヌール・デ・ダムの描写を思わせる。「二階の通路は一目見て、なんとすばらしい光景でしょう。まるで側廊のある大聖堂の巨大な身廊のようです」³⁵]

しかし両者の最大の相違は、マガザン・ド・ラ・ペが最初から新街路に面して設立された大きな百貨店であるのに対し、ボヌール・デ・ダムは古い通りに面した小さな店から拡張を重ねて新しい大通りに進出した店であることだ。その意味で小説中のデパートのモデルになったのは、とりわけボン・マルシェ百貨店であると言われる。³⁶一八五二年にアリステイッド・ブシコーが権利の半分を買取って共同経営者となったこの店は、一八五四年から徐々に拡張を始め、オスマンのパリ改造計画によって隣接するプチ・メナージュ施療院が取り壊された後の広大な敷地を買取り、一八六九年から七二年にかけてはセーヴル通りとヴェルポー通りの角に大きな新館を増築（設計はアレクサンドル・ラプランシュ Alexandre Laplanche）、さらに七二年から七四年にかけてはヴェルポー通りに沿って増築（設計はルイ・シャルル・ボワロー Louis-Charles Boileau とギユスターヴ・エツフェル Gustave Eiffel）をおこない、最終的にはバビロン通り、セーヴル通り、ル・バック通り、ヴェルポー通りに囲まれた区画いっぱいを占めることになった。³⁷

ただし付言しておく必要があるのは、すでに述べたようにボン・マルシェだけでなく他のデパートも多かれ少なかれ拡張を図り、第二帝政末頃から第三共和制にかけての時期に新店舗への改築を行っているということである。一八五五年にホテルの一角にオープンしたルーヴル百貨店は、徐々にホテルの部分を浸食し、一八七四年には建物全体の権利を買収して（ホテルは通りの反対側へ移転する）、一八七七年には区画いっばいに改築した新館をオープンした（設計はアンリ・デュボワ Henry Dubois⁽³⁸⁾）。一方一八六四年、ジュール・ジャルゾが設立したプランタン百貨店は、当初かなり大きな店舗を持っていたが、一八七四年に新館を作ってエレベーターを設置、さらに一八八一年三月九日の火災の後にはただちに再建工事を開始し、一八八二年から八五年にかけて新しい建物を完成させた（設計はポール・セディーユ Paul Sédille⁽³⁹⁾）。このうち、一八八二年十月にル・アーヴル通りに面した部分がオープンしたときには、ゾラはちょうど『ボヌール・デ・ダム百貨店』を執筆の最中であり、とりわけ九章や十四章における新館の描写には影響を与えていると言われる⁽⁴⁰⁾。

それではゾラはなぜ、マガザン・ド・ラ・ペの存在した場所を選んだのか、そしてそこに他の多くの百貨店に共通して認められる拡張の論理とオスマン計画の利用を導入して、ひとつの架空の百貨店を作り上げたのかという疑問に立ち戻りたい。「十二月十日通り」の選択には、いくつかの理由が考えられる。

第一に、古いパリと新しいパリの対比が明確に出ることである。たとえば左岸に位置するボン・マルシェの場合、付近はそれほどの商業地区ではなかったが、ゾラがボヌール・デ・ダムを位置づけたパリの二区は、リシユリユエ通りやヴィヴィエンヌ通り、パサージュ・シヨワズールなどを含む区域で、十九世紀前半において、マガザン・ド・ヌーヴォーテをはじめとする多くの小売り商店が密集し、流行の先端を作る地区として興隆していた場所である。十八世紀末から七月王制下にかけて多数つくられたパサージュが集中していたのもこの地区であった。それはパリの盛り場が、十八世

紀後半のバレ・ロワイヤルから、しだいに西へ移動してグラン・ブルヴァールや改造後の新しい大通りの方へと向かう過渡的な場所だったのである。ゾラはボヌール・デ・ダムを設定した自筆の地図の横に、次のように書き込んでいる。「百貨店はヌーヴリサン・トール・ギユスタン通り、サン・リタンヌ通り、シヨワズール通り、グラモン通り、パッサージュ・シヨワズールの小間物屋を殺し、リシユリユール通り、ヌーヴリデー・プチ・シャン通りの店も殺し、サン・トノレ通りやモンマルトル通り、ラ・ペ通り、そしてブルヴァールにまで、その影響を及ぼすだろう。」⁽¹⁾この地区においては、百貨店の発展が付近の小商店を食いつぶす状況を、まさに目に見える具体的な形で描くことができたのである。

ジャンヌ・ガイヤールは、二区においてゾラが描き出したような小商店とデパート、古いパリと新しいパリの対立は、ゾラがこの小説を設定している一八六〇年代にはまだそれほど顕著ではなく、真の危機が訪れたのは、ゾラが執筆に取りかかる直前の一八八〇年頃であると指摘している。すなわち一八七七年のオペラ通りの貫通にいたるまでの何本かの新街路の開通とデパートの発展（ボン・マルシェやルーヴル、プランタンの新館建設）によって、二区の古い街路は決定的な打撃を受け、倒産や閉店が相次いだ⁽²⁾という。小説は第二帝政期に設定されているが、ゾラはここにおいて、執筆当時の現状にむしろ敏感であったことがわかる。

第二の理由として考えられるのは、「十二月十日通り」という名称そのものである。一八七〇年以降、この通りは「九月四日通り」と名称が変更され、現在に至っているが、「十二月十日」というのは、一八四八年、二月革命後におこなわれた共和国大統領の選挙で、ルイ・ナポレオンが大統領に選出された記念日である。それは広く農民や労働者の支持を集め、他の候補を大きく引き離して、得票総数の四分の三に相当する五百四十万余票を獲得するという圧倒的な勝利であった。その後彼は支持者を集めて、「十二月十日協会」*Société du Dix Décembre* という半政治的半軍事的組織を作り、自身の政治活動に利用した。デイヴィッド・F・ベルは、「十二月十日通り」という名称は、ムーレをナポレ

オン三世の体制に結びつけるものであり、とりわけ群衆をコントロールするという両者に共通した才能を想起させるものであるとしている。⁽⁴³⁾ ムーレも売場の配置などによって巧みに群衆を演出する術、また群衆を自在に操作する術に長けていたことは、小説中でしばしば示されているからである。

第三に問題となるのは、「十二月十日通り」が「株式取引場」La Bourseとオペラ座「Opéraを結ぶ通り」であることだ。この通りをオペラ座からさらに東に延長すれば、オーベル通り、ローマ通りによってサン＝ラザール駅と直結し、また西南に延長すればレオミュール通り、モンマルトル通りをへて中央市場に通じる。さらに西に進んでセバストポール大通りまで出れば、東駅、北駅との連絡も確保されている。鉄道駅、株式取引場、中央市場そしてデパート——これらはすべて《ルーゴン＝マカール叢書》中で、「近代」と結びついた特権的空間を構成している場所である。そのことはそれぞれを舞台として一編の小説が書かれていることから明らかだろう（鉄道駅は「獣人」、株式取引場は「金銭」、中央市場は「パリの胃袋」）。一八六一年から工事が始められたシャルル・ガルニエのオペラ座が完成したのはようやく一八七五年のことであるから、「第二帝政下における一家族の自然史ならびに社会史」であるゾラの叢書中にここを舞台にした作品がないのは当然のことだが、「劇場」ということでいえば、「ナナ」を挙げるができるだろう。彼女は「金髪のヴィーナス」を演じるヴァリエテ座の女優であり、最後にはオペラ座横のグラン＝ホテルの一室で死亡するのである。

「十二月十日通り」はこのように、「近代」のキーポイントを形作る地点を結ぶ道路であるわけだが、ここでは特に鉄道駅、株式取引場そして劇場とデパートとの関係をもう少し詳しく考えてみよう。

4 交通・投機・演劇

駅とデパートの関係は、小説の書き出しの数行から明確に示されている。「ドウニーズはサン＝ラザール駅から徒歩でやってきた。彼女は二人の弟とともに、シエルブル発の列車に乗り、三等車の硬いシートで一夜を過ごした後、その駅に着いたのだった。」彼女たちはノルマンディ地方の小都市ヴァローニュから夜行列車でパリに着き、サン＝ラザール駅からまっすぐ、ボヌール・デ・ダムの前にやってくるのである。一八五〇年代から六〇年代にかけては、フランス中に多くの鉄道路線ができ、パリを中心とした鉄道網が完成した時代である。この冒頭部は草稿では一八六四年十月に設定されているが、シエルブルからパリへの全線が開通したのは、一八五八年七月十七日のことであり、物語はそれから六年後ということになる。

サン＝ラザール駅の重要性をいち早く認識していたのはブランタン百貨店であった。ジャリユヅがこのデパートを創立した一八六四年には、オペラ座付近はまだ巨大な工事現場で、オスマン大通りもまだシヨセーダンタンまでしか貫通していなかったが、サン＝ラザール駅は「フランス北西部全体の旅客を吸い込み、ブランタンにそそぎ込むための漏斗⁽⁴⁵⁾」としての役割を期待されていた。そしてシベルプシユが適切に指摘しているように、オスマンの新しい道路網は、⁽⁴⁶⁾ 鐵道を科学技術上のモデルとしていた。それは鐵道線路が地形を突っ切っていくように、邪魔するものを容赦なく取り壊して、直進する道路である。たとえば東駅に発するストラスブール大通りは、鐵道線路の延長であるかのようにまっすぐに南下し、駅とパリの中心とを結んでいる。十二月十日通りもまた、サン＝ラザール駅と結びつく交通上の要路であり、ボヌール・デ・ダムに多くの客をもたらしてくるはずであった。しかも鐵道によってもたらされたのはデパートの客ばかりではなかった。オクターヴ・ムーレ自身を始め、ドウニーズもそうであったように、従業員の大部分が地

方出身者であり、その出身地はフランス全土に広がっているのである⁽⁴⁷⁾。

小説の中でポヌール・デ・ダム百貨店が「駅」にたとえられている箇所は二カ所ある。ひとつは建築的な類似性であり（「それはまるで駅舎の大伽藍 *une nef de gare* のようである、二つの階の欄干に取り囲まれ、空中階段 *escaliers suspendus* や歩道橋 *ponts volants* が横切つてゐた (p.626)」)、もうひとつは人や物資の流通の問題である。これはポヌール・デ・ダムに敵愾心を持つボーデュー叔父の台詞だが、「たくさんの若造どもが、駅の中と同じように作業をし、商品や顧客を小荷物のように扱っている (p.409)」と悪口を言う。しかしここでは駅とデパートが「流通」という点から見れば、同種の構造を持つてゐることがはつきりと指摘されている。それでは株式取引場とデパートについてはどうだろうか。経済面において、第二帝政期、とりわけオスマンのパリ改造事業を特徴づけるのは、すでにアルトマン男爵についての考察の中でも確認したように、その投機的性格であると言つても過言ではないだろう。《ルーゴン・マカール叢書》の中でそれを体现するのが、「獲物の分け前」と『金銭』の主人公である投機師アリスティッド・サカールであるわけだが、オクターヴ・ムーレのデパート経営も、多分に投機的な側面を持つてゐる。ムーレ自身がアルトマン男爵に説明しているように、「店は新しい売り出しを行うたびにその生存を危機にさらしており、資本金がそっくり、トランプの勝負のように賭けられている (p.456)」のである。このようなムーレの経営に対しアルトマン男爵は驚きを隠しきれず、それは「気まぐれで慎重を欠く取引 *une opération fantaisiste et imprudente*」であり、「詩人の考え」ではないのかといぶかる。それに対してムーレは「資本金の連続的で急速な更新」すなわち「一年間にできる限り何回も商品を回転させる」という新しい商業のメカニズムを説明する。「われわれは巨大な資金を動かす必要はない。努力すべきことはただ、買い取った商品を早く売りさばいて、別の商品に入れ替へることであつて、その回数だけ資本金には利益がつく。」そこからいわゆる薄利多売の方針も生まれてくる。しかしいったいだれに、そのような大量の商品を売る

のかというアルトマン男爵の当然の疑問に対して、ムーレは「女性の搾取」[exploitation de la femme というものとも基本的なメカニズムを明らかにするのだが、そのことについては別稿に譲りたい。⁽⁴⁸⁾。

いずれにせよムーレの「機械」は、モーターの回転の速度を上げれば上げるほど、それだけ利益が生じるというものである。彼はそこには「ごまかし」はないことを強調する。それは「長いあいだ熟考し、布地を二倍の値段で売って一発当てる」というようなものではなく、「日常の取引」des opérations courantes であり、「販売の良好な作動」le bon fonctionnement d'une vente によって生じる公明正大な利益であるというのである (p. 460)。それはまさに近代的な株式取引の論理であろう。

ところでムーレは、このように資本金のすべてを賭けての「投機」と見なされている「大売り出し」をひとつのスペクタクルとして、「エクスポジション」として演出している。スペキュラシオン (投機) とスペクタクル (演劇) —— 「株式取引場」と「オペラ座」が結ばれるのはまさにこの線上においてであり、この線こそがとりもなおさず、「十二月十日通り」に他ならないのである。

小説中でボヌール・デ・ダム百貨店の三回の大規模な拡張は、それぞれ記念の大売り出しによってしるしづけられ、全体の構成にリズムを与えている。第四章の「冬物新作大売り出し」grande mise en vente des nouveautés d'hiver、第九章の「夏物新作大展示会」la grande exposition des nouveautés d'été、そして最終第十四章の「白物大展示会」la grande exposition du blanc がそれであるが、このうち二番目と三番目は文字どおり「エクスポジション」という言葉が使われている。ほぼ同時代に発生し興隆した万国博覧会とデパート、そしてオスマン男爵によるパリ都市改造のあいだに密接な関係が存在することはすでに確認してきたが、そこに共通する主要な特性は、スペクタクル空間の創出ということであった。そしてスペクタクル空間といえは、シャルル・ガルニエのバリ・オペラ座は、ただ舞台の上だけ

でなく、建物全体がひとつの壮大な演劇空間として、構想されたものであったのである。このパリ・オペラ座の特色について、しばらく考察してみよう。

フランスではすでに一八四〇年代の前半から、首都にふさわしい大歌劇場の建設が求められていたが、主に財政上の理由からなかなか実現には至らなかった。それがようやく実行段階に入ったのは、ナポレオン三世の治下においてである。一八六〇年九月二十九日、ナポレオン三世は、パリ都市改造計画の最大の建設事業として、オペラ座の建設を布告し、同年の終わりにはだれでも参加できる公開の設計コンクールによって、応募者が募られた。期間は一ヶ月と短かったが、一月末までに集まったのは百七十一もの設計案で、そこから厳正な審査の結果、まず五人の案が選ばれ、二ヶ月後にさらに細かい設計図を提出した結果（二名は辞退）、最終的に当時若干三十一歳のまだ無名の建築家シャルル・ガルニエ（一八二五—一八九八）の作品が選ばれた。工事は一八六一年から始まったが、地下水のために難航し、ようやく建物の南側正面が姿を現したのが一八六七年八月十五日、外郭全体が完成したのは一八六九年であったが内部はまだ未完成だった。一八七〇年の普仏戦争や一八七一年のパリ・コミューンの際には倉庫などに用いられ、工事はのびのびになっていたが、一八七三年にル・ペルチエ通りにあった旧オペラ座が火事で焼失したために工事が急がれ、ガルニエ自身の尽力もあって、一八七五年一月五日、堂々たる完成に至った。この完成記念公演には、ロンドン市長夫妻、スペイン国王アルフォンソ十二世とその母堂、ハノーヴァー王、アムステルダム市長などが招かれ、ヨーロッパ中の名士たちが列席するきわめて華やかなものであったという。時代はすでに第三共和制に入っていたために、ナポレオン三世はもちろんこの式典を主催することはなかったが、ガルニエのパリ・オペラ座はその正面へと通じるオペラ大通り（一八七七年によりやく完成）とともに、ナポレオン三世が帝国の威信を賭けた、パリ改造最大の記念碑ともいうべきものであろう。⁽⁴⁹⁾

そのスペクタクル性は、オペラ大通りからオペラ座正面へと通じる都市空間から始まっている。パレ・ロワイヤルのフランス座（コメディールフランセーズ）とオペラ座というパリの二大演劇空間を結ぶオペラ大通り（当初はナポレオン大通りと命名されていた）は、ナポレオン三世がその居城であるチュイルリー宮殿から壮麗な行列を仕立てて、観劇に向かうためのものだった。オペラ座のファサードはネオ・バロックとも呼ばれる折衷様式で、巨大な多彩色の構成と豪華でふんだんな装飾を特徴としており、ガルニエ自身がこれは「ナポレオン三世様式」であると主張している。この壮麗なファサードのアーチをくぐって中にはいると、まず天井が低く装飾のほとんどない暗い玄関ホールがある。しかしこの簡素さは、その奥にある階段ホールの華麗さを引き立たせるためのものなのである。この階段ホールは四階の天井まで吹き抜けになっており、正面には幅十メートルの大階段が踊り場へと向かってゆるやかに上がり、左右へと分かれていく。天井は三十本の巨大な大理石の円柱で支えられ、二階、三階、四階には、観客席と同じようにバルコニーが階段ホールに向かって張り出している。ホール全体は豪華に装飾され、さらに大階段に面した壁面には鏡が一面に張り巡らされて、華やかさを増幅させている。正面に面した二階には、ヴェルサイユ宮殿の鏡の間に着想を得たとされるグラン・フォワイエ（大休憩室）が設けられ、鏡や大理石、シャンデリア、金箔、彫像などによって宮殿の大広間のよう装飾されている。そしてオルセー美術館にあるオペラ座の縦割り模型を見てもわかるように、このフォワイエと階段ホールを合わせた面積は、観客席の面積よりもずっと広いのである。つまりこのオペラ座においては、観劇行為と同じくらい、あるいはそれ以上に、階段ホールやフォワイエで観客同士が視線を交わし合い、また社交にいそしむことが重視されているのである。

とりわけ舞台装置として格好の場を提供したのは階段ホールであり、そこでは観客の一人一人が主役となることのできたが、オペラ座と同時代に建設されたボン・マルシェの新館やルーヴルの新館などのデパートが力を入れたのも、壮

麗な階段を中心とする空間構成だった。ここで買い物客たちは芝居やオペラを見に行くのと同じように商品を見に行くのであり、また美しく着飾って互いの姿を見るために出かけていくのである。実際『ボヌール・デ・ダム百貨店』においても、客の夫人たちはしばしばデパートの中で出会い、連れだつて買い物し、ピユッフエや読書室で休憩する。この読書室も、オペラ座のグラン・フォワイエほどではないが、豪華に裝飾されていた。

ロザリンド・ウィリアムズは『夢の消費革命』⁵⁰の中で、現代の消費社会の源流を、十七世紀フランスの貴族社会、ルイ十四世の支配するヴェルサイユ宮殿の中に認めている。長い間この消費の宮廷モデルが、「文明」civilisationの理想と一体化しながら、唯一の消費スタイルを構成してきた。そして貴族を模倣しようとするブルジョワもまた、そのスタイルを踏襲する。一方十九世紀半ばに発生した「消費革命」は、自由に消費できる楽しみを一般大衆に開くものであったが、この大衆消費においてはありとあらゆるファンタジーが商業に利用された。エキゾチックな夢、おとぎの国の夢、エロチックな夢など商業に利用されたイメージは無数にあるが、なかでももつとも中心となつたのは「富裕のファンタジー」である。なぜなら裕福であることは多くの夢の共通要素であり、お金さえあれば他の多くの夢も実現できるからである。かくして「大衆消費の環境とは、消費者が一時的に富裕のファンタジーに浸ることのできる場所である。こうした環境は、少なくとも営業時間内にはすべての人々に開かれたヴェルサイユ宮殿であると言える」ということになる。こうしてパリ・オペラ座がそうであったように、貴族文化はブルジョワ社会の中にも根強く受け継がれ、いわゆる「豪華さ」の規範としてデパート建築にも適用されることになる。

以上に述べてきたように、株式取引場とオペラ座のあいだというボヌール・デ・ダムの地理的位置は、デパートが金銭取引と夢、経済的利潤とファンタジー、物質的欲望と想像的欲望との決定的な結合であることを見事に示している。

ゾラにとって「十二月十日通り」の選択は、実に意味深いものであったと言える。ただし現実には、この同じ地理的場所存在したデパート「マガザン・ド・ラ・ペ」は倒産して姿を消し、今日この通りには商店よりも銀行や保険会社の方が多し。そして現在のパリの二大デパート、ギャルリー・ラファイエットとプラタンタンは、どちらもオペラ座の背後にある。それはデパートが、その経済的側面よりも、夢やファンタジーを強調していることと関係があるのだろうか？ いずれにせよ『ボヌール・デ・ダム百貨店』のスペクタクル性については、もつとテキストに即した分析が必要となるが、それは別の機会に論述することにした。

注

(1) この小説とパリの都市改造との関連については、拙論「近代都市の誕生——オスマンのパリ改造とゾラ『獲物の分け前』について」、『論集』（神戸大学教養部紀要）、第五十一号、一九九三年三月、pp.21-62 および「都市の解剖——ゾラ『獲物の分け前』におけるパリの解体工事」『EBOOK』（神戸大学仏語仏文学研究会）、第六号、一九九四年三月、pp.89-119を参照のこと。

(2) 『居酒屋』の舞台は、旧ポワソニエール市門（現在のバルベス・ロシユシユアールの交差点）の界隈（パリ十八区）である。「その年は、町中は上を下への大騒ぎだった。昔のポワソニエールの市門をなくして、外周道路と交差するマジヤンタ大通りとオルナノ大通りが開かれたのだ。もう見違えるばかりだった。ポワソニエ通りの片側がすっかり取り壊されていた。今では、グット・ドール通りから、広大な空が、太陽と大気の輝きが見えた。そしてこの方角の眺めをふさいでいたあはら屋の代わりに、オルナノ大通りに面して、堂々たる大建築が建った。それは教会のように彫刻をほどこされた七階建ての建物で、刺繍のあるカーテンをつるした明るい窓は、豪華な感じだった。この建物は真つ白で、グット・ドール通りの真向かいに建って、その光の連なりで通りを明るくしているようだった。「……」ジェルヴェーズもまた、住み慣れた場末の薄暗い一角を壊してしまう、この都市の美化をいやがっていた。彼女の憂鬱はまさに、自分が零落の一途をたどっているときに、町が反対に美しくなっていくところから来ていた。人は惨めな暮らしをしているときには、頭上に燦々たる光を受けることは好まないものだ。

だから彼女は、ナナを探して歩いているときに、資材をまたいだり、建設中の歩道で難儀して歩いたり、防御柵にぶつかったりすると、無性に腹を立てた。オルナノ大通りの美しい建物は、彼女を激怒させた。こういう建物は、ナナのような娼婦のためものだ。」

- (3) Ms. 10.345, f°22. Emile Zola, *Documents et plans préparatoires des Rougon-Macquart*, édition intégrale publiée sous la direction d'Armand Lanoux, études, notes et variantes par Henri Mitterand, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, tome V, 1967, p.1734
- (4) *Grand Larousse de la langue française*
- (5) Cf. Piedade de Silveira, «Les magasins de nouveautés», in *Au Paradis des dames, Nouveautés, modes et confectiions 1810-1870*, Editions Paris-Musées, 1992, p.16. っれは一九九三年に「リ」の「レ・カリエラ（モードと衣裳の博物館）」で開かれた展覧会のためのカタログでもある。この章における「フランスの「マハートの歴史に」については、このカタログの諸論文のほかに、以下の書物を参照した。Jeanne Gaillard, *Paris, La Ville (1852-1870)*, Honoré Champion, 1977; Bernard Marrey, *Les Grands Magasins, des origines à 1939*, Picard, 1979; Michael B. Miller, *The Bon Marche, Bourgeois Culture and the Department Store, 1869-1920*, Princeton University Press, 1981; Jean-Paul Caracalla, *Le Roman du Printemps, Histoire d'un grand magasin*, Deno 1, 1989, 北山晴「『おじやれと権力——十九世紀「リ」の原風景——』三省堂、一九八五、鹿島茂「デパートを発明した夫婦」、『講談社現代新書』一九九一。
- (6) Honoré de Balzac, *Grandeur et décadence de César Birotteau*, in *Œuvres complètes*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, tome VI, p.59
- (7) たぐえ⁴⁵タビ・ルージト Au Tapis rouge 1784年「ピグマリオン Le Pygmalion」1793年。
- (8) 一八二八年のガイドブック (Le Guide Richard) では「「リ」に二七〇の「サー」があり、「華やかで品物は豊富だが少々高い店」が並んでいる」と記述がある。 Cf. Jeanne Gaillard, *op. cit.*, p.527
- (9) *Ibid.*, p.526
- (10) Henri Mitterand, «Notice» in *Au Bonheur des dames*, Gallimard, collection «Folio», 1980, pp.547-548
- (11) *Op. cit.*, p.48
- (12) *Op. cit.*, pp.531-533

- (13) たとえばゾラの『ボヌール・デ・ダム百貨店』の中では、ボヌールの向かいで小さなラシャ生地店を営むポーデュは、「ただのマガサン・ド・ヌーヴォーテがあらゆるものを売るようになった」ことを嘆いている。「むかし、商売が誠実だったときには、ヌーヴォーテは生地だけで、それ以上のものは扱わなかった」のに対し、今では近隣のメリヤス店も、下着店も、毛皮店も、手袋店も、競争を強いられているのだった。
- (14) *Op. cit.*, p. 69
- (15) *Op. cit.*, p. 528
- (16) Emile Zola, *La Curée*, in *Les Rougon-Macquart*, édition intégrale publiée sous la direction d'Armand Lanoux, études, notes et variantes par Henri Mitterand, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, tome I, 1960, pp. 496-497
- (17) 注一の拙論「近代都市の誕生——オスマンのパリ改造とゾラ『獲物の分け前』について」pp. 52-53を参照。
- (18) *Op. cit.*, pp. 528-529
- (19) 『ボヌール・デ・ダム百貨店』からの引用については、ブレイヤード版のページ数をカッコに入れて本文中に示す。Emile Zola, *Au Bonheur des Dames*, in *Les Rougon-Macquart*, édition intégrale publiée sous la direction d'Armand Lanoux, études, notes et variantes par Henri Mitterand, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, tome III, 1964, pp. 389-803
- (20) ヴォルフガング・シッセルブシュ『鉄道旅行の歴史——一九世紀における空間と時間の工業化』（加藤二郎訳）、法政大学出版局、一九八二、p. 235
- (21) *Ibid.*, p. 240
- (22) *Op. cit.*, p. 529
- (23) Philippe Hamon, *Expositions——littérature et architecture au XIX^e siècle*, José Corti, 1989
- (24) 正確には、執筆は一八八二年五月二十八日から一八八三年一月二十五日まで、雑誌連載 (*Gil Blas*) は、一八八二年十一月十七日から一八八三年三月一日まで、本の出版は一八八三年三月二日。
- (25) Henri Mitterand, art. cit., p. 556
- (26) 「パラディ・テ・ダム(二)婦人方のパラダイス」(Au Paradis des Dames) は、リヴォリ街八番地に実在した。「つっ

た者」の準備草稿の中でゾラは他に店名として、「四季」Aux quatre Saisons「気まぐれ」Au Caprice「寒がりの女」A la Filleuse という三つの候補を考えている。この中で「四季」は小説中で、最初ボヌール・デ・ダム の絹物売り場主任だったプートモンが独立して設立するライヴァル百貨店の名称として使われることになるが、この店は主として実在のプランタン(春)百貨店 Au Printemps をモデルとしている。

第二帝政期までに創業したデパートもしくはマガザン・ド・ヌーヴォーテの店名をいくつかのタイプに分けてみると、(a) 当時当たりをとった芝居やバレエ、もしくは小説などの題名(特に十九世紀初め)、(b)「コンパニー・デ・ザンド(インド商会)」「キャラヴァンヌ(隊商)」のようにオリエントを想起させるもの、(c)「マリー・スチュアート」「ダム・フランセーズ」のように貴婦人、もしくは「ベル・ジャルディニエール(美しい庭師の女)」のように特定のタイプの女性をあらわすもの、(d)「ボン・マルシェ(お買い得)」「ガリニユ・プチ(薄利)」「コワン・ド・リュエ(街角)」のように、安さ、手軽さを強調するもの、(e)「ブラス・クリシー」「ルーヴル」のように地理的な場所や隣接性を示すもの、(f)「ヴィル・ド・パリ」「ヴィル・ド・リヨン」のように品物の産地を示すもの、(g)「シユヴルー＝オーベルト」「ガジュラン」のように、経営者の名前を掲げたものといった分類が考えられる。

- これらの名称と比較すると、ゾラの考えた四つは、美しい女性を表す(c)のタイプに「寒がり」「四季」「気まぐれ」「幸福」など感覚的、感性的な要素をつけ加えようとしていることがわかる。「何よりも夢を呈示する」ようにしたネーミングはプランタン(一八六九年の年鑑には「ここでは店名と同様、すべてが新しく新鮮で美しい」と歌われている)に代表される比較的新しい傾向であろう。もちろんレイチエル・ボウルビーの言うように、「オ・ボヌール・デ・ダム」は「オ・ボン・マルシェ」と共通の耳に心地よい頭韻「オ・ボン」を持つており、「女性たちの幸福」と「安い買い物」とが精妙な響き合いを見せていることも確かである(『ちょっとと見るだけ——世紀末消費文化と文学テクスト』高山宏訳、ありな書房、一九八九年、p.81)。

(27) 『ボヌール・デ・ダム百貨店』では“le fils d'un fabricant de toiles”となっている。

- (28) 『たった煮』からの引用については、ブレイヤッド版のページ数をカッコに入れて本文中に示す。Emile Zola, *Pot-Bouille*, in *Les Rougon-Macquart*, édition intégrale publiée sous la direction d'Armand Lanoux, études, notes et variantes par Henri Mitterand, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, tome III, 1964, pp.3-386

(29) Jean des Cars, 《Emile Zola et le Paris d'Hausmann》, in Jean des Cars et Pierre Pinon, *Paris-Hausmann*, Edition du Pavillon de l'Arsenal, Picard éditeur, 1991, p.167

- (30) ベルナル兄弟の「主」についてを参照した。Jean Tulard, éd., *Dictionnaire du Second Empire*, Fayard, 1995, pp.993-994
- (31) *Pierre Pinon*, 《Entreprise et financements》, *op. cit.*, pp.102-106
- (32) *Op. cit.*, pp.525-531
- (33) 以下の準備資料中の《Notes Beauchamps》の中で、Jの頃（Jはジュリエット）を指している（B. N., Ms, NAF 10278, fos 205-6）。それによると経営悪化の理由は二人の経営者（Leurs Lingères）と遊んでいたからだとする。その他、イカサマン・ユ・ラ・ベリゴラ、Jの「Piedade da Silveira の論文」 pp.23-24 及び Bernard Marry, *op. cit.*, pp.52-53 を参照。
- (34) Préface à l'édition de 《folio》 pp.7-8
- (35) *Le Monde illustré*, 28 mai 1869, article signé par Comtesse A. de Boretty
- (36) *Bouquin*, p.743, note 3, p.850, note 1, p.851, note 1 ロナルド・ベッナルは、Jが四年間勤務したアンシエント書店の拡張の中心人物だとする。
- (37) Bernard Marrey, *op. cit.*, pp.69-77
- (38) *Ibid.*, pp.85-89
- (39) *Ibid.*, pp.97-104
- (40) Jeanne Gaillard, 《Préface》, p.11
- (41) N. A. F. 10278, fos 323-324
- (42) Jeanne Gaillard, 《Préface》, pp.19-23
- (43) David F. Bell, *Models of Power, Politics and Economics in Zola's Rougon-Macquart*, University of Nebraska Press, 1988, pp.107-109
- (44) 『一九世紀フランス大辞典』の“chemin de fer”の項目を参照。Mantes-Lisieux 間（二三五四）間は一八五八年七月一日、Lisieux-Caen 間（四六四）は一八五五年十二月二十九日、Caen-Cherbourg（三三二四）間は一八五八年七月十七日にそれぞれ開通している。
- (45) Bernard Marrey, *op. cit.*, p.90
- (46) シュルムシマ『前掲書』p.226

- (47) Octave Mourret はもろから南仏の架空の町 Plassans の出身である。ほとんどの従業員はフランスは、すべて実在の出身地が明記されている。 Denise Baudu —— Valognes (Normandie), Bourdoncle —— Limoges, Bouthemont —— Montpellier, Hutin —— Yvetot (Normandie), Favier —— Besancon, Deloche —— Briquebec (Normandie), Lhomme —— Chablis, chef de la cuisine —— Auvergne, Clara Prunaire —— les bois de Vivet, Marguerite Vadon —— Grenoble, Pauline Cugnoit —— Chartres, etc. 手袋売場の Mignot は「店では珍らしいベリーの子の子」であつた。
- (48) 拙論『ソラ『ボヌール・デ・ダム百貨店』における近代消費社会とジェンダー』【EBOOK】(神戸大学仏語仏文学研究会) 第九号、一九九八年一月掲載予定。
- (49) Cf. サイモン・ティドワース『劇場——建築・文化史【新装版】】(白川宣力・石川敏男訳)、早稲田大学出版部、一九九七年; Stéphane Wolff, *L'Opéra au Palais Garnier (1875-1962)*, Slakine, 1983
- (50) 吉田典子・田村真理訳「工作舎」一九九六年。(原書は Rosalind H. Williams, *Dream Worlds —— Mass Consumption in Late Nineteenth-Century France*, University of California Press, 1982)
- (51) 前掲書 p.98